人生と信仰（二）

福島政雄

午前中主として歎異抄の第一章を申しましたが、これから第二章に入ります。近角先生御存命の時「歎異抄にはあちらこちらに名所がある」とよく仰せになりましたが、その意味は目立つて私共の心に響くところではなからうかと思ひます。第二章もその一つでして非常に特別な感じのする章であります。

それについて法然上人と親鸞聖人の関係ですが、法然上人はどういふ方かと言ひますと、私が最初に法然上人を知つたのは東大の学生時代、村上専精先生の日本佛教史の講義の中の言葉に「日本佛教史上の高僧方で一番偉い人は傳教大師で一番円満な人は法然上人だ」と教へられたのが印象深く心に残つて居ります。後になつて佛教関係の本など読み、日本佛教史上一番大切な鎌倉時代、その頃の佛教界の大本の力を呼びおこされた根本が傳行大師にあることを知りました。大師の開かれた叡山は高僧を多く生み出した処で、大師はまことに偉大な人だとうなづかれます。然し偉いと言ふ意味では聖徳太子もお偉いと考へられます。大師は一筋に僧として行かれたが、太子は日本を双肩に背負ひながら、然も佛教が渡來したばかりなのに、あれほど佛教の精神を実践されてゐられます点は実にお偉い方だと私は思つてゐるのですが、それはそれとしておきませう。

次に法然上人はずつと叡山で育つた方です。御生れは岡山縣昔の美作国の誕生寺といふお寺が今あります。静かな所で産湯の水をお取りになつた井戸も今なほ残つてゐます。上人が九歳の時お父さんが夜討をうけて深い傷をうけられました。勢至丸と呼ばれた幼少の上人は松明の光に照らされながら弓をしぼつて仇を射つて眉間を傷つけました。父君時国は枕頭に上人を呼んで「親の仇として定明を討つてくれるな、さうすると仇の子がお前を仇として殺す。さうなると何時までも仇として殺し合はねばならぬ。だから出家して菩提をとむらつてくれ」と遺言して死なれたと言はれてゐます。そこで早速出家されましたが十五歳の時、師に認められて叡山に登り、ここで学問を励み、四十三歳までに一切経を五回くり返してお読みになり、念佛の道を感知されたのです。遺された書物の中に、有名な話として次のやうなことがあります。

上人が流罪ときまつて四国に流される途中室の宿を舟で通

らゞたとき、一人の遊女が上人の小舟に近づいて「私の様な浅間しい仕事をしてゐる者はどんなにしたら救はれるでせうか」とおたづねしたら「止められるなら止めて念佛申せ、止められぬならそのままで念佛申せ」と応へられました。その遊女は後に遊女をやめて念佛に日を送つたと傳へられていますが、如何にも円満なお姿が感じられます。

親鸞聖人と言ふ方は私の感じではそんなに円満なお方ではなく、非常に鋭いところのある、人を飽くまで叩きつける様なお方だと感じて居ります。聖人の色々のお言葉や、西本願寺にあります鏡の御影といふ御肖像がありますが――これは直弟子の專阿といふ人が聖人御入滅のすぐあとでかいたものと言はれてゐますが――それを拜しましても先づ感じましたことは親鸞聖人は生優しい人ぢやない、頬骨のあたりの感じが鋭く、意志の強い方であるといふ感じですが、その御眼を見ると何とも言へぬ慈愛の眼であります。これで全体の御性質がわかるやうに思ひます。その全身の感じは相当頑丈で、私はよく考へますのは熊谷直実と角力せられたら聖人の方がお勝ちになるかも知れないとさういふ感じがいたします。だから普通に親鸞聖人傳とされて居るのを見ると、御公卿出身で優さ形の感傷的な方であるかと思はれますが、実はさうでなくて飽迄も意志の強い鋭さをもち、然しその奥に慈愛をもつて居られたと感じられました。この聖人が京都の六角堂に百夜こもる願を立て、その九十五夜の曉に聖德太子の御廟に傳へられて居る、太子の二十句の偈文を唱へて居られて、つゞウトウトとなさつて居る間に、夢に観音のお告げがありました。それが御伝鈔第三段のお告げであります。それから吉水の法然上人のもとにおいでになり、そこへ百日行かうと決心なさいまして、降る日も照る日も、いかなる大事にも通ひづめに通つて法然上人の御教をおききになり、始めて絶対他力念佛の道に徹せられたのです。このことは東信尼公の御手紙にそつくり出て居ます。これが歎異抄二節の出るところです。「たとひ法然上人にすかされまゐらせて念佛して地獄におちたりともさらに後悔すべからず候」といふのです。西洋風に考へると、法然上人の人格への絶対信頼と言ひたい処ですが……それも一応はその通りだとも言へませうが……私共はかう考へたい。人間と言ふものに缺点のないものは無い。法然上人がどんなに円満な立派な方であつたとしても、矢張り人間として缺点をお持ちになつてゐられたでありませう。ことに親鸞聖人の様に鋭いお方には、その教に心から服しながらもさう言ふ処をお見抜きになつてゐられたに違ひありません。

又近角先生を引合に出しますが、私は先生の学舎で親鸞聖人の信仰に目を開かれたのですが、近角先生を非難のうち処のない人と崇め奉つてゐるわけではありません。矢張り人間同志ですから先生は偉いが、こんな処が缺点だと感ずることがあります。先生も「近角といふ人間を見てくれるな、缺点があるのだから、ただ佛の慈悲を汲みとつてくれ」と仰せになりました。近角先生は求道学舎に大学生を十人餘り置いて

居られましたが、日夜先生と起臥してゐたものは、先生はああだ、かうだと言ひ、先生の御教の方は大して熱心に聞かない。或人など「近角先生はせつかちで尊敬しなかつたが、奥様は観音さまのやうに良い方だつた」など言つたことがあります。男の目に女の缺点は見え難いのでかうも思つたのでせうか。

さう言ふ風ですから「たとひ法然上人にすかされまゐらせて、念佛して地獄におちたりとも、さらに後悔すべからず候」と言ふのは、法然上人の人格への絶対信頼と感じたら間違ひで、法然上人によつて絶対他力、大慈大悲の彌陀の本願を教へて頂いた、かう言ふ風に解すべきであります。

私共は青年期になりますと親に反抗したりする様になりますが、それでも何処か親に頭が下るところがあります。私の友人で近角先生に教へられた人に、そのお父さんと何かピツタリしない苦しみを持ち続けていた人がありますが、「結局、親は親、子は子、そのままで居て広大無辺の佛の慈悲が頂ける」といふ境地に到達されてゐる人があります。親子の関係でさへもただ人間の関係としては子が親の缺点を見てシツクリ行かぬ場合が多くありますが、然しさういふ苦しみを通して、もつと大きなものに目覚めて行くことになります。さうすると親子の間といへども人間と人間との関係だけでは解決出來ないが、彌陀の御慈悲を通じて親と子のもつと廣大なる関係を感ずるやうになります。法然上人と親鸞聖人でもさうで、親鸞聖人はその鋭さをもつて法然上人にあるひは人間としての缺点を感じて居られたか知れませんが、法然上人の御縁によつて無限絶対の佛の慈悲を知るやうになつた。それはこの世ばかりでなく遠い昔からの宿縁が熟して法然上人を通して絶対の御慈悲に眼が開かれた、親鸞聖人のお心持はそこにあつたに違ひないのです。そこのところから此の二章の前述のところを読むのであります。法然上人を善知識として、その法然上人を超越した大きなものを感ずる、そこから出て來る言葉であります。

それから「各々十餘ケ国の境をこえて、身命をかへりみずしてたづねきたらしめたまふ御こころざし、ひとへに往生極楽の道をとひきかんがためなり」といふところであります。

歎異抄の筆者は唯円坊だ、如信上人だと言ふ二説があります。一般には唯円とされてゐる様ですが、近角先生も初めは唯円だとされてゐましたが、後には如信上人だと言はれる様になりました。

そこで「十餘ケ国のさかひを越えて」といふのは福島縣に如信上人の遺跡がありますが、そこから京都への十餘ケ国と解されることになります。近角先生がその様に言はれますので、私の心では筆者が唯円坊のやうにも思はれ、又如信上人のやうにも感ぜられます。「十餘ケ国の境をこえて云々」とあるのが、わざわざ京都まで出て行つた人の手になつたとしか思はれない緊張が感ぜられます。さうすると如信上人ではないかも知れません。この大決心をもつて命がけで十餘ケ国の境を越えて、はるばる京へ出た、その人の非常に眞剣な心に

対して親鸞聖人はズバリとものをおつしやつてゐられます。

それは始めに「念佛は学問の問題ではない。学問の問題なら、奈良なり叡山なりに行つて聞けばよい」と言ひきつて居られる。私などのやうに学問をして居ますと、どうしても学問が鼻につきまして、そのために念佛を知らないでただ軽蔑したりしてゐたやうに、何と言つても学問が鼻について來る。口では信仰は学問の問題ではないと言つて居ても、心の中では学問の値うちをどうしてもつけやうとする傲慢になつて居ます。内側から私を見て居る家内が、どうも頭が高くていかぬと申しますが、私自身はさうぢやないと思つて居ますが、矢張り傲慢になつて了ひます。それを第二章では眞向から打ち消して

「念佛よりほかに往生のみちをも存知し、また法文等をも知りたるらんと、こころにくくおぼしめしておはしましてはんべらんはおほきなるあやまりなり」

と学問など問題ではないと言つて居られるのです。

歎異抄は第一章から第八章までそれぞれ第十一章以下の一章づつに相当してゐると近角先生から承つてゐますが、第二章に相当する第十二章を見ますと

「学問せばいよいよ如來の御本意をしり、悲願の広大のむねをも存知して、いやしからん身にて往生はいかがなんどとあやぶまんひとにも、本願には善悪淨穢なきおもむきをもときかせられさふらはばこそ学生の甲斐にても候らはめ」

とあります。之を言ひかへると、「本当に学問をしたのなら、学問を拔け出さねばならぬ。本願には善悪、淸浊の差別のないことを懇切に說いてこそ学問をした甲斐がある。学問が鼻についてゐる間は駄目で、学問を拔けて信仰の世界が味へなくては嘘である」といふのです。

その次に「親鸞におきてはただ念佛して彌陀にたすけられまゐらすべしとよきひとの仰せをかうぶりて信ずる外に別の仔細なきなり……たとひ法然上人にすかされまゐらせて念佛して地獄におちたりとも更に後悔すべからずさふらふ云々」とありまして、法然上人への絶対信頼のやうで、実は念佛して彌陀の本願にたすけられようとするにある。勿論法然上人は善知識でありますが、法然上人に絶対に從ふのは彌陀の本願への道を開いて下さつたからであると解さなければなりません。

私に二十程年の違ふ弟があり東京で裁判官をやつて居りますが、求道会館が出來ると入れて頂き四年間ほど近角先生の御世話になつてゐましたが、それは近角先生は偉い人だと言つて居りますが、肝心な信仰には少しも触れてゐないのです。言はば近角先生を偶像にして信仰界の英雄に祭りあげてそれを崇拜してゐるだけであります。さうした狀態では生命のひびき合ひ、心の通ひなどはありません。極端に言へば近角先生を骨董品扱ひにしてゐるに過ぎません。それでは折角四年間も求道会館において頂いて何の得るところもなかつたといふことになります。自分の弟なのに私では何とも出來ま

せん、これが人間なのだと思ひます。「ただ念佛して彌陀にたすけられまゐらすべし」と言ふことを弟と語り合い度いと思ひますが、それが出來ません。さう云ふ淋しい感じが致します、それが人生の淋しい姿です。

親鸞聖人は法然上人によつて、久遠のまこと、自分に無限の同情を寄せてをられる彌陀佛を教へられた。そのことを教へられたために自分が地獄に落ちても悔いぬとおつしやるのです。かういふ姿こそ人間の最も望ましい姿です。

私は淋しがり屋で、何を求めて淋しがつてゐるのか、数多いことでありますが…　私は女に迷ひ易い人間ですが、然し現実の女に出会つて見ると、自分の夢に求めてゐた女性はこの女ではなかつたと思ふ。非常に罪深い話です。現実の女性を食いものにしてその死骸を越えて自分の夢を追うて行く男だと自分で診断してゐます。この様に相対五分五分の人間同志の間には、眞の私の要求は求め得られるものではないのです。すると一体私は何を求めてゐるかと反問してみるわけです。

私の第一の善知識は近角先生で、第二の善知識は臼杵祖山先生です。臼杵先生は世に知られて居られませんが、先生を知る何人かの人に懇ろに教を說いて居られ、一昨年七十七歳でおなくなりになりました。私は広島に居る時十年程御化導を受けました。何時も靜かに靜かに信仰上のお話をされましたが、何時か叡山で大無量壽経を說かれた時は非常に熱をもつてお說きになつたのでビックリ致しました。私は甘へつ

兒でありますから先生に甘へました。よく御訪ねして信仰上のお話をうかがひました。

先生が中津の方に居られた時、先生をお訪ねして泊めて頂いた時、信仰の話などそつちのけにしてお酒などのお相手をしては謠曲など歌つてお聞かせしたり、十五夜には稻田を前にお妹さんも交へて明月を樂しんだり致しました。此の淋しがり屋の私がその時だけは母のやうに広大な胸に抱かれて、人生の淋しさを忘れてゐたのです。

私が五十一歳の時チブスで入院した時、いろいろなお方から御見舞を頂きましたが、その中で一番暖い心のお方は臼杵先生ではありませんかと家内が申します程に、本当に暖かい人でした。然し先生のお話はむつかしかつたのですが……。

私は淋しい淋しいと考へたがる人間ですが、それを忘れてゐたのは臼杵先生の胸に抱かれてゐたときですが、さう言ふ彌陀の大悲に淋しさを忘れていたのだと思ひます。近角先生は昭和十六年、臼杵先生は一昨年なくなられましたが、かういふ知識によつて開眼させて頂いた大慈悲の世界に私の淋しさを忘れてゐるのです。

親鸞聖人は斯う言ふ感傷的な人ではありません。或時広島で或る人が「あの日蓮上人が手紙の上では感傷的だが、感傷的だと思つてゐた親鸞聖人の手紙には少しも感傷的なところがない」と言つて居ました。尤も「釈迦如來かくれましまして二千餘年になり給ふ、如來の遺弟悲泣せよ」と正像末和讃にありますが、之も感傷的ではないし、愚禿悲歎述懷もよく

味へば少しも感傷主義ではないのが解ります。末法を歎いては居られますが決して感傷主義的に弱く歎いて居られるのではなくて、深く徹底させて居られます。法然上人に対しても同じであります。

次に「彌陀の本願まことにおはしまさば釈尊の説教虚言なるべからず、佛説まことにおはしまさば善導の御釈虚言したまふべからず、善導の御釈まことならば法然の仰そらごとならんや、法然の仰まことならば親鸞が申す旨またもて虚しかるべからず候か」と、お釈迦様、善導大師、法然上人から親鸞聖人へと連なる佛のひびきがありますが、これを授ける直接の御縁となつた法然上人に対されて、以上述べました心持が第二章を通じて居ります。

終りに「この上は念佛をとりて信じ奉らんともまた捨てんとも面面の御はからひなり」とあります。どうか信じて呉れといはれるのでなく、自分の心はこの通りだが、あなた方のよい様に！是処に無限の諦めが見られます。佛教の諦めは、いかに人を不悶に思つても人間と人間との関係は思ふやうにならぬといふ人生の因縁の本來を明にかするといふことであります。斯うして聖人は「このうへは」と、つまり面面のはからひによつてどうにでもなるといふものでなく、遠い因縁によつてきまるものだからめいめいに求めて行け、開けるかも知れぬ、開けないかも知れぬと言はれるのであります。

第三章のお話をすこし致しませう。この章の中心は善人悪人の問題です。法然上人の御言葉として伝へられてゐる「悪人なほ往生す、いはんや善人をや」といふ言葉の逆でありまず。

或る人に「法然上人と親鸞聖人とはこのやうに反対のことを言はれているがどう言ふわけか」と尋ねられたことがあります。

私が答へましたのは「善人なほもて」と言はれた親鸞聖人は御自身を何処に置いて考へてゐられたであらうか、法然上人はどうか」かう考へると勿論親鸞聖人が自分を善人の処においておつしやつたのではない。

これについて私のことを話すことになりますが、一体私達は自分は悪人だと本氣で言へるでせうか。私は一年半程ドイツのベルリンに居ましたが、その家の奥さんは五十位の人でした。或時私は悪魔の様な者だ」と私が申しますと「私達の国では、それは人を釣る言葉だと言ひます。あなたは自分では悪魔ではないと言つて貰ひたいのでせう。」と言はれました。口では悪と言つても心の中ではいや善人だと言はれたいと思つて居る、輪に輪をかけた悪人なのです。だから自分の本当の姿が見えないで善人だと思ひたがる人でさへ助けられるのだから、ましてハツキリ自分を悪人だと自覚して歎いてゐる人は助けられるのに間違ひないのだと考へたい。法然上人は素直に自分を悪人と認め、自分でさへ助かると感じられたのに、親鸞聖人は自分を善人としか思へない輪をかけた悪人と考へて居られるのです。以上のやうに話すと「そかります。だから悪人だと言ふのは佛様の御聲を受ける自覚の上に現はれたのだと思はれます。かう言ふ風に此の解釈を味へば味ふ程深い味が出てくるのであります。まだ言ひ足りないのでありますが、

以上大略ながら私の味ひからこの章を申し上げたつもりであります。

（文責編者）

昭和二五、七、十三、於法通寺、午後講話

1207

塩飽島参詣の記

丸尾猪太郎

塩飽島は古來塩飽七島と言つて、瀬戸内海の最も狭くなつたところ、香川縣の海上にある嶋嶼である。このあたりにはこの塩飽七島が中心となつて数多の小島が、各異つた勝景を描いて碁布してゐる。

承元の昔、法然聖人が配流された塩飽島は「ほんじま」と云つて周囲四里、塩飽七島の筆頭となつてゐる。丸亀市を距てる海上三里、中間に牛島と云ふ小島があつて、それがため丸亀から望むとこの島の翠巒は其半ばしか見へない。

聖人、承元元年三月十六日、京都をたたれて、海路十日、この「ほんじま」にお着きになつた。そしてこの荘の預り主駿河守高階時遠入道西仁の館にお入りになつた。西仁は薬湯を設けたり、美膳を調へたりして、遠來の聖人を厚く御歓待申上げた。西仁は聖人御滞在中、朝夕聖人から如來超世の他力本願のわけがらを承り、遂に遣瀬なき大悲の御思召に徹到した。「いまこそこころへはんべりぬれと、手を合せてよろこびにけり」と覚如上人は具さに拾遺古徳伝に、西仁入信の狀を書き残し下されてある。

聖人の御伴のうちに、近角先生から信仰の例話として屢々

承つたお馴染の随蓮坊がゐる。私の地方の者は、讃岐へ熊谷がお伴をして來たと言つて、処々に其遺跡、木像などを伝へているが、熊谷が讃岐に來たことは諸書に見へない。彼は晩年郷里武州熊谷にゐて、御流罪の翌秋郷里で往生したのであるから、熊谷の讃岐に來たと言ふ伝説は恐らくはこの随蓮坊のあやまりであらう。

燈ひ起せば明治四十一年である。讃岐佛教会主催の夏期講習会が六月三十日から七月七日まで八日間、高松市内福善寺に於いて開かれた。近角先生は講師としてお越しになつた。これは先生が香川縣伝道の第三回目である。講本は二門偈と十七憲法であつた。私はこの夏初めて先生の講話を承つた。そして私が直接先生にお目にかかり親しくお話を伺つたのは七月一日早朝、旅館可祝を訪問したときであつた。

「自分は斯く四国に來ながら、未だ塩飽島に参詣したことがない、今年は講話に支障なく、繰り合せがつけば是非参詣がしたい」と先生が仰有ると、幹事の神谷師その他一、二の人達が会場の片隅で語り合ふのを私はその傍で聞いた。

神谷師は私に「丸尾さんはお近くだから塩飽島はよく御承知でせうね」「すぐ差向ひの島ですからよく知つてゐますがまだ行つたことはないのです」と答へると師は再び「丸尾さん先生のお伴して行きませんか」「是非お伴がしたいものですなあ」と私は熱望の意をあらはして答へた。

談は遂に纒つた。七月三日午後講話を終つて高松出発、翌日正午までに帰着の予定と決つた。そして受講者の丸亀市の塩田氏兄弟もこの一行に加はることとなつた。

丸亀から艀船で出発、沖合の「まじま」で本船に乗りかへた。船には島に帰る人、島に行く人、旅商人等が処狭く詰めあつてゐる。泊り浦で上陸したが、月影もの凄く、あたりは淋しい漁村であつた。浜辺近くの旅宿に泊る。

一行は聖人御配所を偲ぶにふさはしいきわめて素朴な島の宿の一室に通されて一夜を明した。先生は頗るお疲れの様子だつたので女中を呼んですぐ床を取らせた。間もなく先生は高鼾で熟睡されたが、私は容易に眠られないので雑想に耽つてゐると、あたりの静まるにつれ磯辺に寄せる濤の音が高く聞へてくる。私も何時しか濤音に誘はれて深い眠に入つた。

夏の夜はほのぼのと明けかけた。先生は私が目を醒ませてゐるのに氣付かれて「どうです。丸尾君、よく寢られましたか」「はい、よく寢ました」「朝のお祇はここでしませんか」やがて皆々打ち揃つて、正信偈、源空讃の晨朝のお勤めが始められた。

先生はお声の抑揚につれて漂ふやうにおからだを自然に左右に揺かせてゐられる。その先生のお態度が如何にも無邪氣であつて、所謂天眞爛漫な先生の性格をよく現はしてゐられた。私はこれを見て、先生と言ふお方は並々の方ではないと深く感銘させて頂いた。勤行がすむと先生は御持参の選択集を取り出されて高らかに読み上げられた。

朝餉を手早く終へると、十数町の小路を歩んで御配所の旧

地と伝へる笠島浦の專称寺に詣でた。寺域は低い丘を背にして小高い所にある。道傍十数級の石磴をのぼり楼門を入れば本堂である。現在は総てが改築されてゐるが、当時の堂宇は柱歪み軒傾き頗る荒廃していた。今この寺は浄土宗鎮西派の末寺となつている。

先生は親しく礼拝ののち、前面佛壇間近く進み、安置された数個の佛像を一一凝つと拝観してゐられた。これは先生が何かの史料を求めてゐられたのであらう。然し今この寺やこの島には唯伝説が残るのみで、聖人御配流当時の史料と認められるものは殆んどない。僅かに口卑として西仁の持佛と爪立の名号などがあるが、これとても聖人当時のものとは思へない。先生はそれを私共が遺憾に思つてゐると察せられたものか「元來塩飽本島と言ふこの島全体が聖人御流謫の御苦労を偲ぶ一大遺跡であつて、この島の土はまさしく承元の昔、法然聖人と言ふ大聖が來られ、親しく其足跡を印し給ふた尊き土である」と仰せられた。

追々出立予定の時刻が迫つて、最後の禮拝を遂げて、寺族や世話人に送られて寺門を辞した。途上幾度ともなく後を振り返つて見られる先生を促し、やつと泊浦に引き返した。附近の浄土宗の寺をもたづね、なほ出帆に僅かの時間があつたので、俄かに思ひついて先生に記念の揮毫を願ふと、にわかにお書き下さつたのは

「一心に專ら彌陀の名号を念じ、行住坐臥、時節の久しきと近きとを問はず、念々にして捨てざるもの、是れを正定の業と名く。彼の佛の願に順ずるが故に

戊申七月四日、塩飽参拝記念、常観書」

であつた。先生の御執筆は漢文のままであるが、私が拝読の便宜上和文に致しました。

さてこの御言葉は、聖人四十三、黒谷の報恩蔵において、善導和尚の観経四帖書のこの文によつて始めて選択本願念佛に徹到された極めて大切な世にも名高い御文である。

帰航、丸亀に正午近く着き海岸の小亭で昼食をしたため、郊外櫂堀の正宗寺に旧跡をたづね、出発間際の列車に乗り込みやつとのことで講習会場に帰りついた。

○

最後に「求道誌」の先生の御教化によつて選択集の尊い所以と聖人讃岐御流謫の眞意を伺はせて頂くこととする。

〃「彌陀の五劫思惟の願をよくよく案ずればひとへに親鸞一人が爲なりけり」親鸞聖人は決してこの御言葉を軽軽しく仰せ下されたのではない。法然聖人選択集の段々の御教化を頂いて、此五劫思惟の御本願で、往生の一大事を御決得下されたからであります。

念佛称へたき者は、念佛を称へるがよい、外の行を仕度ければ、外の行を仕てもよいと言ふのなら、何も法然聖人際立てて、南無阿彌陀佛をお説き下さる用はないのである。茲の処が実に法然聖人の御教化の肝腎で、法然聖人はこの爲、七十五歳の御時、讃岐の塩飽島に御流罪にお遇ひ下されたのである。外の行で行き度き者は外の行でゆくがよい、念佛称へ

たき者は茲に彌陀の本願念佛があるからといふ御教化なら御流罪にお遇ひ下さることは何も無かつたのである。法然聖人御流罪は何れの行も及ばぬ、仕て見樣なき罪業深重の者が、此親樣の南無阿彌陀佛一つで救はれるのである。と茲を隱さず、常に打出してお示し下されたからであります。〃

○

〃法然聖人がお弟子西阿の「時節柄お念佛を少し御遠慮になつては如何」との言を排して「汝經釈を見ずや」と激しく発せられた其御一言は、聖人が飽迄自説を固持せんとせられたのではない。この選択本願念佛の他力本願の如來のお惠みを頂かずば、我等は他に助かるべき道はないのである。是れがため聖人一命をかけて仰せられずに居られなかつたのである。まことに聖人の御流罪は日本佛教の最大事件であつて、我らは之れによつてこそ、眞実の念佛を聞かせて頂くことが出來たのである。〃

――以上求道誌より拔――

○

当時近角先生が「塩飽島に参詣がしたい」と仰せられたのは、世にありふれた寺院古跡をたづねるといふ簡単な思召ではなく、熟々聖人御苦労の実地につき、之れを拜して聖人山海の鴻恩を深く感謝したいものだとの切なる懇念であつたことが、求道誌を通じてよく判らせて頂いたことでした。

○

丸亀市の塩田氏兄弟は、先生の御伴が出來たことを無上に喜ばれ、何とかしてこれを永く記念したいものだと考へられた結果、毎月記念の会合をすることとして、その会の命名を先生にお願ひした。すると先生は直ちに叮寧な御書簡に典拠を付して御命名下されたのが「うしほ会」であつた。それは左記二首の和讃に拠られた。

名号不思議の海水は、逆謗の屍骸もとどまらず、衆悪の萬川帰しぬれば、功徳のうしほに一味なり。

尽十方無碍光の、大悲大願の海水に、煩悩の衆流帰しぬれば、智慧のうしほに一味なり。

先生はこの「衆悪の萬川」の衆悪が塩飽と国音相通ずることに思ひ着かれて斯く命名して下されたのであつた。

其後間もなく塩田氏兄弟は逝かれ、今は先生も御往生されてすでに十年、一人取り残されて独りぼつちになつてゐる私は、先生の御伴して塩飽島に詣でた遠い昔のことが新しく思ひ出されて、追慕の涙に堪えない。

偶然か、必然か、曾て先生は私に「蘭林遊戯」の四文字を御揮毫下さつたことがある。勿論先生の当時の御心持は、如來の御苦労を示されたのであるが、今は私に取りまして、先生が現実に還相の行動に出でられ、益々この私に如來の御眞実を御知らせ下さることとなつた。

嗚呼、顧みれば長い年月、私は先生の御慈育を蒙りました。其肝腑は「ただ如來のお見捨てなき大慈大悲」一点である。また晩年先生が強調して下さつた「絶対信仰より來る人生の経営」は、外面如何にも誠実らしい顔をして、其実虚偽不淨の生活に営々としてこれに甘んじてゐる私を、どこどこまでも清淨眞実の御まことを以て御覽下されてお導き下さるる大悲の親の紅涙と仰ぎ、この不孝不義の私なるにあやまり入り奉るばかりであります。

信味點滴

編者

本年六月以來、痼疾を養ふてゐる私に、病身ながら働ける場所と静養に好適な草庵を惠まれ、霜月の初めに移り住ませて頂きました。

家移りのゴタゴタも半ば片付いた天氣のよい午後、日当りのよい南の廊下で、大戦以來全く久々の日光浴をしてゐると、私の周囲に蠅や蜂や蚊などが障子や板戸や廊下に沢山集つて、私同樣日向ぼつこをしてゐる。私もその仲間に入つて陽光を浴びながら、蠅の色々の仕草や、蜂の飛び交ふ姿をじつと見入つて、今に訪づれる永い暗いそして寒い冬の日を堪へて越さねばならぬ虫類の生態をあれこれと想像してゐた時、フト私の胸に「やつと出來たばかりの家の一寸した温い場所を、こんな小蟲が、どうしてこんなに速く見出し得たのだらうか」との疑問が浮んだ、「不思議だなあー」と歎ずると共に「明るさと温かさが自然にひきつけた」のだといふ驚異であつた。

○

願みれば私共が念佛申さずにゐられない根本が、如來の大悲大願の「明るさと温かさ」にひきつけられてゐるのである。

火宅無常の寒風に、煩悩具足の氷結、愚痴無智の黒暗裡に震へ慄き、惑ふ外ないが、「ただ念佛のまこと」にひきつけられて自然にやすらぎとやはらぎを惠まれるのである。

然も一度その「明るさと温かさ」を知らされる者は二度とそこから離れ得ないで、放浪の児が故郷の家にひきつけられるやうに常に帰入せしめられる。

○

ここはまたどうしたことであたたかき

――池山先生遺詠――

○

天も地も來るべき冬の仕度に大童の晩秋、小蟲も亦温い場

所に護られて、やがて訪づれる春の陽光を待つであらうが、私共も亦、無碍の慈光に浴して、生死の苦海を渡り、念佛成佛の自然の淨土を期すばかりである。　十一、二〇、誌。

○

中外紙上に天野文部大臣を初めとし知名の方々の叫びとして、聖德太子の御廟を中心として太子会を結成し、全国に叫びかける準備に大童であるとのことであつた。年末をひかへてまことに朗報としてよろこぶ次第である。ここにも敗戦以來の寒さ身に滲む人々が、太子の一佛乘の御眞意に溫みを感知し、ひしめき合ひ乍ら集られてゐるやうに感ずる。

然し当事者の方に会ひ得ない私には眞意が何処にあるのか不明であるが、意地の悪い私の本性から推すと、太子様をかつぎ廻つて、他人に押しつけるやうなことのないやうにと願つてやまぬ。戦爭中は「臣道実踐」とか「承詔必謹」を利用して太子様がてんやわんやとかつがれた。太子利用信者のないやうにと切望する。

但し今度の動きで快よく感ずるのは宗團を超えてゐることである。何処にも「溫みと明るさ」を見出し得ない者が、太子の眞精神の明るさと溫さに自然にひかれてのやむにやまれぬ運動であつてほしい。

○

十一月廿日の夜、小谷善一氏のお宅に福島先生が御一泊と聞き、発病以來初めての夜間外出をし、親しくお目にかかつた。

先づ、十一月八日の先生の追放解除のお慶びと御息女の御逝去のお悔みと、原稿頂戴した御礼など雜然と申し上げ、数時間御話を承つた。長い蟄居生活の私にはよろこび限りない一夜であつた。

御自身の駄目さを投げ出されて、ひとへに如來の御計に安住される先生は滿面に喜悦の御姿をもつて談論風発、東西古今に走つて然も寂然。維摩詰方丈の説法にめぐり会つたよろこびであつた。　十一、二二、誌

御案内

一道會館落成記念法話會

時　十二月二十四日（日曜）午后一時半

所　名古屋市南区駅上町二ノ二八　一道会館
（市電、新郊通一丁目下車東へ一丁鬼頭氏北隣）

人　山下成一先生

十二月二日。近角先生御往生の十週年の御命日である。早朝來、先生の色々な御姿が私の胸に去來する。

明治三十年來、宗教の自由を提唱せられて宗教法案の議会通過を防いで來られたのに、宗教家の一部が政府に懐柔せられて、御晩年の病臥中に法案は実施せられた。

松岡全権の国際聯盟脱退の報をきかれて「日本人が日本を亡すのか」と歎かれた先生が、大平洋戦爭開始の寸前に念佛の息絶へられたのであるが、御胸中如何に悲痛遊されたことであらうか。

更に御長男文常師の支那での御戦死、誠にお淋しい晩年であつたと御推察する。

○

跡戻り跡戻りして辿るかな
甲斐なきことにこころまどひて

御病中の先生が最も強く感銘せられた歌ときく、御生涯を通じて佛の絶対の大悲一つを縱横無尽に御説き下された先生が、御自らその広大な御眞実一つにはからはれて念佛遊すお姿が眼前に髣髴とする。

○

視野は再び轉じて、先生の御一生を通じて常に愛唱せられた長詩に及ぶ

霊界冥々として測るべからず
大海の一粟、凡小の身
誰れか知らん佛意の那辺に存するを
山間忽ち落つ花一輪
長江萬里水上に浮べば
人生百年、光悠々。
誦し來り誦し去るとき靈氣身に溢れるのを覚える。

○

「山間忽ち落つ花一輪」我慢のやまぬ、眞似目になれぬ、腹立ちのやまぬ、このして見やうのない者を、可愛相と見て下さる広大なる佛の御眞実に「忽ち落つ」へたへたと参つてしまふのである。

一生一度の廻心である。如來眞心の徹到である。念佛申さんと思ひ立つこころのおこるきざみである。

○

近角常音先生の御歌に
このこころこれを阿闍世とのたまひて
みすてじといふみ慈悲なりしが
よしあしはひとにはあらん大悪の
阿闍世われにはよしあしはなし

常観先生に常随されて求道実に二十年、「忽ち落つ花一輪」を味到された時の御歌と承はる。

○

我々はああもなれぬ、こうもなれぬ、困つた困つたを繰り返すのであるが、その事自体が何時かはなんとかなれるといふ未來の善を夢みてゐて、佛の仰せをよそにした自力我慢の心である。時には斯ふした駄目な奴をお目当の本願であると、佛を引きよせて安心しやうと小細工をめぐらして見るが空しい。それもそのはづ、安心したいといふ我執が中心になつて、佛をその目的達成の手段としてゐるのだから。

進むも我慢、退くも我慢、止るも亦我慢、一分一厘如何ともすることの出來ぬところに「その我慢のやまぬ奴が可愛さう」と見てとつて下さる方の御眞実をとどけて下さつたのが先生御一代の御教化であつた。それがそのまま七祖の御心、世尊の御本懐でまします。　（十二、三、誌）

編集後記

年の瀬も間近に迫りました。本年も彌陀の心光照護の下に存分の御活動遊された事とおよろこび申上げます。

慈光誌も内に外に、表に裏に諸大士菩法姉の大いなる加威力を蒙りまして第三の春を迎へやうとしてゐます。

一道会館も落成、十二月二十四日の日曜に午後一時半から落成記念講話会を開かせて頂き、それをきつかけとしまして來春から第一と第三の日曜の午後の法話会を開かせて頂きます。

私は癇疾とて治すべくもありませぬが、六月以來半年の蟄居生活から限度を測りながら冬眠から醒めた蛙のやうに、覚束ない動きをさせて頂いてゐます。親友の一人が見舞つて下されて「まだ急行に乘つたのとも思へないが準急だなあ」と申しました。各駅にゆつくりと停車して行き度いのでありますが、それも叶ひませぬ。「また急ぎ浄土に参り度き心もなくて、いささかの所勞もあれば死なんずるやらんと心細く覚ゆることも煩悩の所爲なり」の、「心細く覚ゆる」の一句が身に滲む昨今であります。それにつけましても「死」によつて崩れてしまふ事にのみ心を煩らはしてゐる自分の愚さ、しぶとさ、哀れさを自照せられることであります。

この愚鈍な私にのらせ給ふ太子靈法「四生の終帰、万国の極宗なり。何の世、何の人か是の法を貴ばざらん」の聖句は、時代をこへ、民族を超へた不滅の法燈を高く揚げ示されてゐる。又「たとひ死刑に行はるとも念佛の一儀はとゞむべからず」と御流謫決定の日の法然聖人の御氣色、「われなくも法はつきまじ和歌の浦の、青草人のあらん限りは」と知らしめて下さる親鸞聖人の德音、皆大法の永遠と不滅の確信を基盤とされて自然に流出した金言である。

◇

福島先生の「人生と信仰」はこれで終りましたが、新年に「善人と悪人」の稿を頂戴いたします。法に照らされて自己の姿を正視されての法話の数々、深く敬へられることであります。

△「鹽飽島参詣の記」は、近角先生を導師と仰がれて法然聖人の遺德に直面せられた丸尾氏の感銘記であります。

「往生之行念佛爲本」の法然聖人の大行がそのまま親鸞聖人の「信心爲本」の大信と開華して、表に顯はれ裏に隱れ、内にこもり外に現はれて、肝膽相照らされつつ両聖人が鈍根の我等を自在無碍に引接攝化して下さる浩恩を渴仰申すばかりであります。丸尾氏の住所、香川縣多度津町家中です

ふるさとや　臍の尾に泣く　年の暮　芭蕉

（花田記）

慈光第二卷第十二號　昭和二十五年十二月十五日發行（毎月一回十五日發行）

昭和二十五年十二月十日印刷
昭和二十五年十二月十五日發行
毎月一回十五日發行
定價　一部金拾五円（郵税共）
一年分金百八拾円（郵税共）

名古屋市南区駈上町二ノ二八
編集兼發行人　花田正夫

名古屋市千種區千種町馬走二八
印刷人　本田政雄

名古屋市千種區千種町馬走二八
印刷所　千草印刷所

名古屋市南区駈上町二ノ二八
一道会館
發行所　慈光社
振替口座番號　名古屋一〇四七〇番

2.7.29